

史跡仁和寺御所跡

2022年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

史跡仁和寺御所跡

2022年

公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様に広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、排水溝施工に伴う史跡仁和寺御所跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

令和4年12月

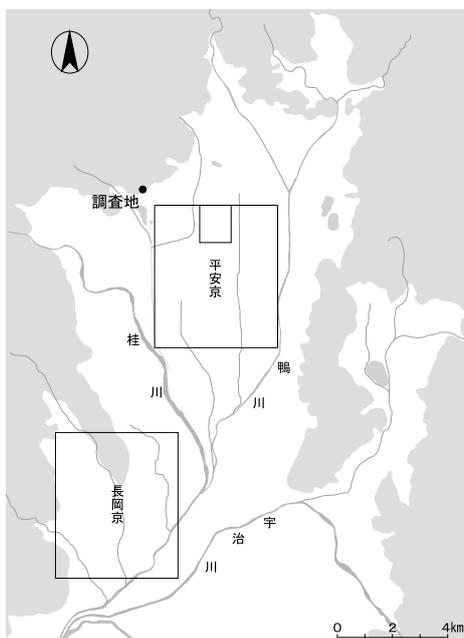
公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

所 長 井 上 満 郎

例 言

- | | |
|----------|--|
| 1 遺 跡 名 | 史跡仁和寺御所跡 |
| 2 調査所在地 | 京都市右京区御室大内33 |
| 3 委 託 者 | 宗教法人 仁和寺 代表役員 瀬川大秀 |
| 4 調査期間 | 2022年5月19日～2022年6月1日 |
| 5 調査面積 | 6.8㎡ |
| 6 調査担当者 | 渡邊都季哉・南 孝雄 |
| 7 使用地図 | 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「宇多野」・「衣笠山」を参考にし、作成した。 |
| 8 使用測地系 | 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した） |
| 9 使用標高 | T.P.：東京湾平均海面高度 |
| 10 使用土色名 | 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。 |
| 11 遺構番号 | 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。 |
| 12 本書作成 | 渡邊都季哉 |
| 13 備 考 | 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、調査業務職員及び資料業務職員があたった。 |

(調査地点図)



目 次

1. 調査経過	1
(1) 調査に至る経緯	1
(2) 調査の経過	1
2. 位置と環境	3
(1) 歴史的環境と立地	3
(2) 既往の調査	3
3. 遺 構	7
(1) 基本層序	7
(2) 遺 構	8
4. 遺 物	9
(1) 遺物の概要	9
5. ま と め	10

図 版 目 次

図版1	遺構	調査区平面・南壁立面オルソ画像（1：60）
図版2	遺構	調査区平面図、南壁立面図（1：60）
図版3	遺構	1区・2区平面図（1：30）
図版4	遺構	調査区立面・断面図（1：50）
図版5	遺構	調査地全景（北東から）
図版6	遺構	1 2区全景（北西から）
		2 1区全景（東から）
		3 1区石敷1（北西から）
		4 2区断割部断面（西から）

挿 図 目 次

図1	調査位置図（1：5,000）	1
図2	調査区配置図（1：200）	2
図3	1区調査前全景（東から）	2
図4	2区調査前全景（西から）	2
図5	作業状況（北西から）	2
図6	1区遺構養生状況（東から）	2
図7	周辺調査位置図（1：2,500）	4
図8	2区土塀構築部（北東から）	7

表 目 次

表1	周辺調査一覧表	5
表2	遺構概要表	7
表3	遺物概要表	9

史跡仁和寺御所跡

1. 調査経過

(1) 調査に至る経緯

本調査は、史跡仁和寺御所跡排水溝施工工事に伴う埋蔵文化財発掘調査である。調査地は京都市右京区御室大内33に位置し、仁和寺の敷地内にある。

2021年の豪雨によって、仁和寺境内の中心に位置する中門東側の土塀が損傷し、石垣が崩壊した。原因が排水不良と判明したことから、排水施設の整備が必要となり、中門東側の土塀北側に排水溝を設置するため、施工業者が掘削を行うこととなった。それに伴い、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、「文化財保護課」という）が掘削工事の立会調査を行ったところ、地表面から0.8m下で石敷が確認されたため、発掘調査が必要と判断された。発掘調査は、文化財保護課の指導の下、宗教法人仁和寺から委託を受けた公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所が実施した。

(2) 調査の経過

調査区の設定は、文化財保護課の指導の下、西側を1区、東側を2区とした。1区は南北幅1.5m、東西幅2mで、調査面積は3㎡である。2区は南北幅1.5m、東西幅2.5mで、調査面積は約3.8㎡である。合計調査面積は約6.8㎡である。

調査は2022年5月19日から開始した。調査の結果、中門東側の江戸時代の造成土とそれに伴う石敷、中門の地業となる石敷を検出した。全て人力で掘削・検出を行い、図面作成・写真撮影・メタシェイプによる記録作業を行った。掘削した土は、フレコンバッグに入れて原状回復ができるように管理した。

検出した石敷は地中保存されることとなったため、これより下層の調査は必要最小限の断割に



図1 調査位置図 (1:5,000)

留めた。記録作業終了後、遺構を保護砂と土嚢で養生し、同年6月1日に全ての現地調査を終了した。

調査中は適宜、文化財保護課および名勝仁和寺御所庭園整備委員の視察を受けた。

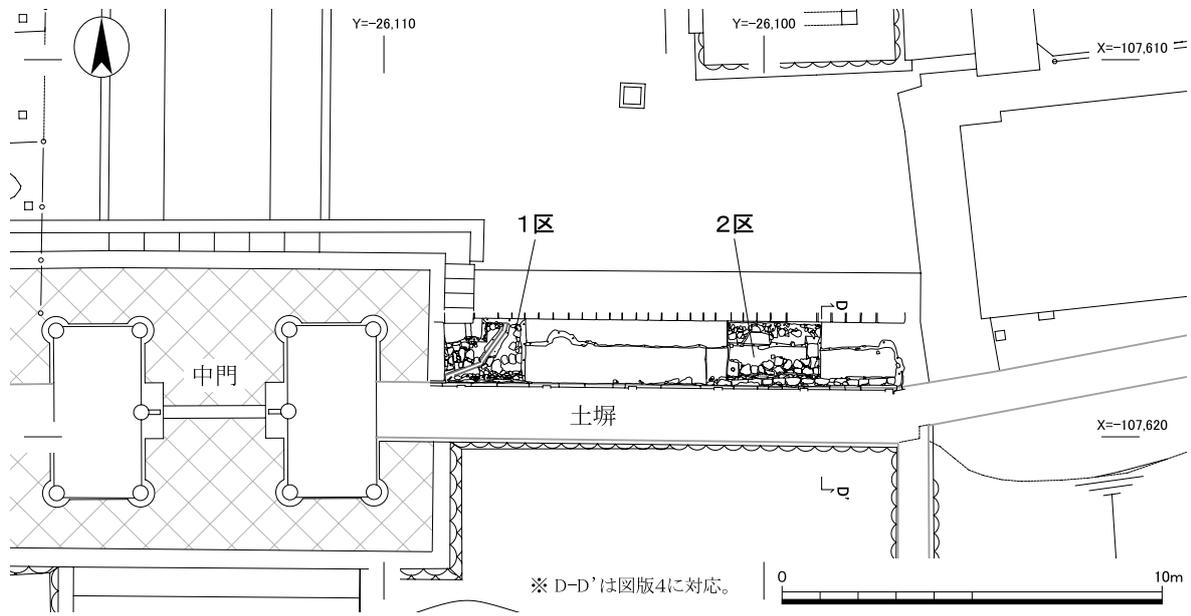


図2 調査区配置図 (1 : 200)



図3 1区調査前全景 (東から)



図4 2区調査前全景 (西から)



図5 作業状況 (北西から)



図6 1区遺構養生状況 (東から)

2. 位置と環境

(1) 歴史的環境と立地

調査地である仁和寺は、京都盆地北西部に位置する成就山の南端に立地する。北東に龍安寺、南東に妙心寺、西側に福王子神社が所在する。南は独立丘陵で名勝に指定されている雙ヶ岡に臨む。

仁和寺全体の標高をみると、北に位置する金堂の周辺は89.5～89.8m、南端に位置する二王門の周辺は74.2～74.8mである。敷地の南北長約350mに対し、約15mの高低差を持ち、地形は北から南へとひな壇状に下がる。一方、調査地の標高は82.2～82.4mで、周辺はほとんど平坦である。

仁和寺は、仁和2年(886)に光孝天皇が発願し、仁和4年(888)に宇多天皇によって落成した。その後、宇多法皇が僧房を造営して生活したことから、御室御所と称される。宇多法皇が崩御した後は、皇族が入寺して住職(門跡)を務め、明治維新時に純仁法親王が還俗するまで続いた。平安時代から鎌倉時代にかけては、仁和寺周辺に、円融寺・円教寺・円乗寺・円宗寺のいわゆる「四円寺」と呼ばれる御願寺を含む多くの寺院が建立され、多くの院家も造営された。しかし、応仁2年(1468)、応仁の乱ですべての堂塔が焼失し、江戸時代まで荒廃した状態が続いた。

寛永11年(1634)に、覚深法親王が仁和寺の復興を徳川家光に申し入れ、幕府の寄進を受けて復興が開始された。寛永17年(1640)には、後水尾上皇によって御所の一部(紫宸殿・常御殿・台所門・清涼殿)が下賜された。これに続き、寛永18年(1641)から正保4年(1647)にかけて二王門・観音堂・五重塔・経蔵・中門・鐘楼・九所明神社殿が建てられた。現在の仁和寺の大半は、寛永期の復興によって形成されたものである。

明治維新時、純仁法親王の還俗を機に、皇族が住職となることは途絶えた。明治20年(1887)の火災によって、本坊の大半が焼亡した。その後、明治23年(1890)に玄関と宸殿(現白書院)が建てられ、明治43年(1910)から大正3年(1914)にかけて本格的な復興が行われ、現在に至る。昭和13年(1938)に国の史跡に指定され、また、平成6年(1994)にユネスコの世界遺産「古都京都の文化財」の構成資産の一つとして登録された。金堂が国宝に、そのほか14棟の建造物が重要文化財に指定されている¹⁾。

(2) 既往の調査

現在の仁和寺は、大きく3つの地区に分かれる²⁾。南東部の円堂院地区、南西部の御殿・本坊地区、北半の伽藍地区である。仁和寺敷地内での発掘調査は、基本的に南東部の円堂院地区と南西部の御殿・本坊地区で実施されており、伽藍地区は試掘・立会調査のみ行われている。

円堂院地区

平安時代 調査1は、工事に伴う不時発見であるが、金・銀製の合子や越州窯青磁合子などが出土した。調査2では、平安時代に建てられた八角円堂と考えられる建物の基壇南辺・南西辺を検出した。基壇は一辺が10.6m(約35尺)である。また、隅部の東石が出土している。この東隣の調査

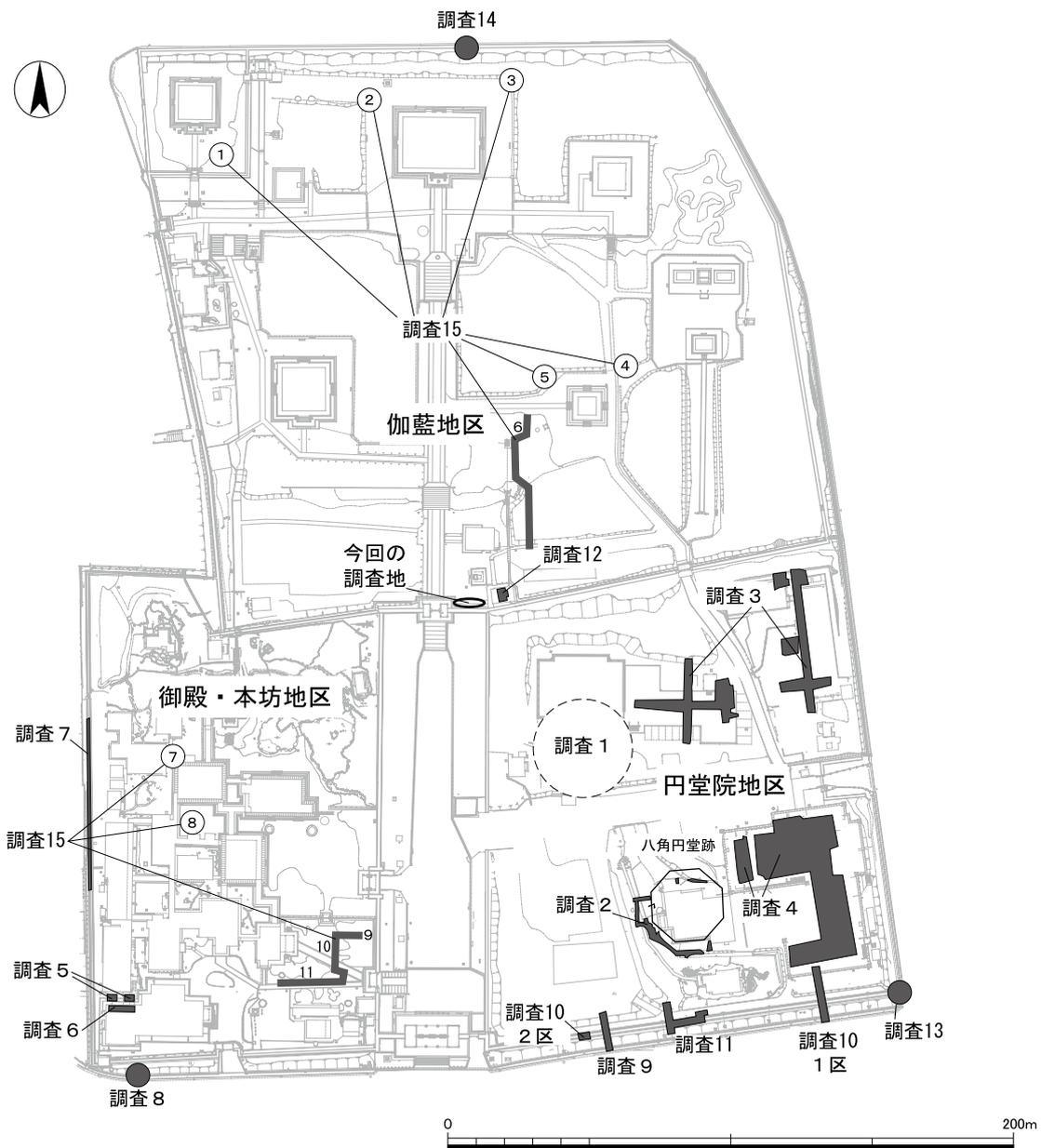


図7 周辺調査位置図（1：2,500）

4では、平安時代中期の土塁・僧房跡・雨落ち溝、平安時代後期の溝・築地跡を検出した。検出した八角円堂と僧房跡の方位はやや異なり、八角円堂の建築は僧房より遅れると推定されている。調査3では、平安時代の円堂院東側を区画すると考えられる築地跡が検出されている。また、鎌倉時代以前の火葬遺構も検出されている。調査9・10では整地層を確認している。特に調査10で検出した整地層は、現在の土塚の位置よりもやや南側で土塁状に高くなっており、敷地境界となる土塁が存在したと考えられる。調査11では平安時代の東西方向の溝と整地層が検出された。

以上を総合すると、平安時代の円堂院地区は、八角円堂や僧房などの施設が並び、東側は現在の敷地境界より内側で、築地によって区画されていた。南側は、現在の敷地境界とほとんど同じ位置で、溝と土塁状整地層で敷地を区画していたと考えられる。

江戸時代 調査9・10では、江戸時代前期の土塚基礎や江戸時代後期の階段状遺構・路面を検

表1 周辺調査一覧表

番号	調査年度	調査方法	内容	文献
1	大正4年 (1915)	不時発見	霊宝館南側で、金製・銀製の合子や越州窯青磁合子などが出土。	1
2	昭和36年度 (1961)	発掘	八角円堂跡の基壇南辺・南西辺を検出。一边は10.6m(35尺)。花崗岩の隅東石と裏込めを検出。栗栖野瓦窯産の緑釉瓦が出土。	2
3	昭和47年度 (1972)	発掘	溝状の遺構を伴う築地跡を検出。円堂院の東限を区切るものか。鎌倉時代以前の火葬遺構を検出。	2
4	昭和51・52 年度 (1976・77)	発掘	八角円堂跡東側で僧房跡を検出。僧房は梁行4間・桁行15間の南北方向の建物。北に対して若干西に振れ、八角円堂の方位と異なる。僧房の東西端には雨落ち溝。	3
5	平成11年度 (1999)	発掘	境内南西部で、江戸時代の西面築地と側溝を検出。17世紀後半に埋没しており、現在の築地は埋没前後に西に8m拡張されている。	4
6	平成12年度 (2000)	発掘	江戸時代の南北方向築地跡と側溝、井戸を検出。江戸時代前期から中期にかけて、築地部分が石敷路面になる。また平安時代後期から鎌倉時代の築地状遺構と溝を検出。寺域を画する築地と溝の可能性。	5
7	平成20年度 (2008)	発掘	現在の西面築地と石垣は、寛永期の整地層の上から成立しているものの、出土遺物から江戸時代後期の成立と推定。南半部は明治期の作り替え。築地の下からは暗渠を検出。暗渠は底に平滑な石を並べ、両脇に割石を立てて、上部に蓋石を架ける。	6
8	平成22年度 (2010)	発掘	南西土塀の解体修理に伴う。土塀の内側に南面する石垣を検出。江戸時代末期から明治時代と考えられ、門の内側で虎口を形成していたか。	6
9	平成24年度 (2012)	発掘	二王門東側の調査。太鼓土塀を解体。南門設置のために版築土塀が開削された痕跡として土塀の西側断面に木口が認められ、調査区南側で検出した階段状遺構は南門に伴う可能性。太鼓土塀の基礎部の延石はモルタルやコンクリートが目地に詰められており、近代以降に作られたことが判明。真光院が仁和寺に合併された際に南門を解体して階段状遺構を埋め、太鼓土塀を構築して遮蔽した。平安時代の整地層を検出。	7
10	平成24年度 (2012)	発掘	2つの調査区を設定。調査9同様に階段状遺構を5段検出。太鼓土塀の南側の延石は江戸時代前期のものをそのまま再利用し、北側延石は抜き取られて整地されている。整地層の下からは厚さ0.7mの基礎地業を確認。北部では江戸時代後期の整地層の下から厚さ1mの江戸時代前期と推定される整地層。さらに下層には平安時代後期の土塁状整地層。	7
11	平成26年度 (2014)	発掘	二王門から東に約75m地点。江戸時代の基礎地業を検出。下層から平安時代の土塁状整地層と溝を検出。	7
12	平成27年度 (2015)	試掘	中門東側の調査。G.L.-0.5mで中世の整地層、G.L.-0.7mで平安時代の整地層、G.L.-1.1mで基盤層を確認。平安時代の遺構を検出。	8
13	平成28年度 (2016)	立会	二王門東側土塀東端木口の木製貝形の修理に伴い、貝形の取付状況を調査。0.1～0.2mの厚みで版築積みされており、0.7mの大きな単位で3つに区切られる。下段を積んだ時に貝形を据える。	7
14	令和元年度 (2019)	立会	境内北限の土塀の調査。瓦土塀と呼ばれるもので、熨斗瓦が埋め込まれている。熨斗瓦は平瓦を半裁したもので、江戸時代前半と考えられる。延石は花崗岩が用いられる。土塀の本体は団子積みで積まれる。	7
15	令和3年度 (2021)	試掘・立会	1 Tr. : 御影堂南東部。G.L.-0.1mで遺物包含層、G.L.-0.3mで基盤層。北東に面を揃える石列を確認。2・3 Tr. : 金堂北部。G.L.-0.2mで基盤層。4・5 Tr. : 五重塔北部。G.L.-0.5～0.7mで基盤層。6 Tr. : 五重塔西部。南端はG.L.-0.2mで基盤層。7 Tr. : 黒書院北側中庭。G.L.-0.4mで基盤層。8 Tr. : 黒書院南側中庭。G.L.-0.4mで柱穴、G.L.-0.9mで漆喰溝。溝埋土には火災処理層。9～11 Tr. : 御殿大玄関東側庭部。G.L.-0.3mまでで3時期の参道。G.L.-1.1mまで掘ったが基盤層は未確認。	9

出した。階段状遺構は、江戸時代後期の南門設置の際に設けられた通路と考えられる。調査11では江戸時代の版築土塀の基礎部を検出した。

御殿・本坊地区

平安時代・鎌倉時代 調査5で、敷地境界の可能性のある築地跡と溝を検出している。

江戸時代 調査5で江戸時代前期の築地塀基礎部と側溝、暗渠状遺構を検出した。調査6では江

戸時代中期の石敷路面と側溝、江戸時代末期から明治時代の築地塀の基礎部、井戸を検出した。

近代 調査7では江戸時代後期から近代にかけての築地塀の基礎部、暗渠状遺構を検出した。調査15では、黒書院南側の中庭の第8トレンチで漆喰溝と、埋土から火災処理層を検出した。この火災処理層は明治20年（1887）の火災に伴うものと考えられる。また、御殿東側の第9～11トレンチでは、近代から現代にかけての整地土を3層検出している。

伽藍地区

調査12では、中世・平安時代整地層と基盤層を検出している。調査15では、御影堂・金堂・五重塔周辺で立会調査を行っており、G.L. - 0.2～0.5 mで基盤層を確認した。

註

- 1) 『史跡仁和寺御所跡保存活用計画』 宗教法人仁和寺 2021年
- 2) 前掲註1に同じ

周辺調査一覧文献（表1と対応）

- 1 『史跡仁和寺御所跡保存活用計画』 宗教法人仁和寺 2021年
- 2 杉山信三「宇多野に関係した埋蔵文化財調査 史跡仁和寺御所跡（円堂院跡）発掘調査 報告」『京都市文化観光資源調査会報告書 1973』 京都市文化観光局 1974年
- 3 百瀬正恒・木村捷三郎・杉山信三『仁和寺境内発掘調査報告 - 御室会館建設に伴う調査 -』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第9冊 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 1990年
- 4 平田 泰「史跡仁和寺御所跡」『平成11年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2002年
- 5 津々池惣一「史跡仁和寺御所跡」『平成12年度 京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2003年
- 6 『史跡仁和寺御所跡 史跡等・登録記念物・歴史の道保存整備事業報告書』 宗教法人仁和寺 2012年
- 7 モンペティ恭代・田中利津子・吉崎 伸「第三章 調査事項 第四節 二王門東側土塀発掘調査、貝形木口について」『史跡仁和寺御所跡 歴史生き生き！史跡等総合活用整備事業報告書』 宗教法人仁和寺 2018年
- 8 「VI 試掘調査一覧表 No.76」『京都市内遺跡試掘調査報告 平成27年度』 京都市文化市民局 2016年
- 9 「IV-1 史跡 仁和寺御所跡, 名勝 仁和寺御所庭園 No.73 (2N003)」『京都市内遺跡試掘調査報告 令和3年度』 京都市文化市民局 2022年

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図版4)

調査地の現在の地表面の標高は、1区北西部で82.2m、2区北東部で82.4mと、東から西へ緩やかに下がる。調査地は、1区西側に中門があり、中門から東西に石垣が延びる。石垣の天端から下端までは約2mの段差となっている。石垣の上には土塀が構築されている。1・2区は土塀際の北側に位置する。以下、基本層序、整地層の堆積状況について述べる。

基本層序は、北側では現地表面から、近現代整地層、江戸時代整地層となる。南側は、1・2区ともに上から現在の土塀、土塀の基礎である地覆石・根石・栗石となり、栗石は石垣に伴う(図8)。

江戸時代整地層は、赤褐色中～細砂を主体としており、約0.3m単位で水平に積み重ねる。整地層(図版4-1区東壁7層、図版4-2区東壁5・8・12層)の上面は硬化しており、栗石・根石・地覆石の天端が、整地層硬化面の標高と概ね一致することから、整地層と栗石・根石・地覆石の積み重ねを交互に行うことによって土塀基礎部を形成している。

また、1区では標高81.6m、2区では標高82.2mで、拳大の角礫を多く含む土層(1区東壁7層、2区東壁5～7層)を確認した。角礫は花崗岩が多く、土塀の根石や地覆石、石垣の石材を加工した際に余った端材と考えられる。平安時代から江戸時代の遺物が出土した。

なお、今回の調査では、江戸時代の遺構を地中保存することになったため、調査区全体を基盤層(地山)まで掘り下げる面的な調査を行っていない。2区の東側で断割調査を行い、下層の確認を行った。断割調査では、整地層が少なくとも現地表面から1.1m以下に続くことが明らかとなった。



図8 2区土塀構築部(北東から)

表2 遺構概要表

時代	遺構	備考
江戸時代	石敷1・2	

(2) 遺 構 (図版 1～6)

石敷1 (図版6) 1・2区で検出した東西方向の石敷である。1区では、検出長1.2m、幅0.3～0.5m、2区では検出長2.3m、幅0.3～0.4mである。1区西端の石から2区東端の石までの距離は約9mであり、1区と2区の間にも存在すると考えられる。また、2区の東側の調査区外に延びる。石材は、長径0.2～0.4mで自然石である。石材は平らな面を上に向けて敷き詰めている。敷き詰めた石材は掘形を持たず、整地と同時に施工されている。石敷1を含む整地土は、南側で石垣の裏込となる栗石と接していることから、石敷1と石垣の施工と同時に整地が行われていることがわかる。栗石が石敷と同じ高さまで構築されると、石敷1の上に南から北に緩やかに下がる整地土が覆う(2区東壁10層)。

石敷2 1区西側で検出した石敷である。検出長は東西0.7m、南北0.8mである。長径0.15～0.35mの石を、長軸方向を南北に並べる。2段分検出し、中門の葛石から0.6mで1段下がる。下段の石上面の標高は石敷1と同じである。中門の基壇下まで続くことが確認された。中門の地業として機能する。

4. 遺物

(1) 遺物の概要

遺物は整理コンテナにして3箱出土した。出土遺物には、土器類・瓦類がある。全体の6割を瓦類が占め、土器類は4割である。遺物の時期は、平安時代・鎌倉時代・江戸時代のものがある。江戸時代の遺物が8割を占める。また、出土遺物はすべて近現代整地層と江戸時代整地層に属することから、平安時代・鎌倉時代の遺物は混入品である。なお、遺物は細片のため、図化はせず記述に留める。

平安時代の遺物には、土師器皿A、須恵器鉢・甕、白磁椀、丸瓦、平瓦がある。土師器皿Aの時期は3C～4A段階に相当する¹⁾。須恵器鉢・甕、白磁椀はすべて体部片であり、詳細な時期は不明である。

鎌倉時代の遺物には、瓦器椀がある。内面ミガキが見られる。

江戸時代の遺物には、土師器皿、瓦質土器羽釜、染付椀、施釉陶器灯明皿、軒丸瓦、丸瓦、平瓦がある。軒丸瓦は「仁和寺」銘である。施釉陶器灯明皿は整地層の中でも上層（図版4-2区東壁4層）から出土した。

註

- 1) 平尾政幸「土師器再考」『洛史 研究紀要 第12号』公益財団法人京都市埋蔵文化財研究所 2019年

750年	840年	930年	1020年	1110年	1170年	1260年	1350年	1410年	1500年	1590年	1680年	1740年	1800年	1860年
1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	
A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C	A B C

表2 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク掲載遺物点数	Aランク未掲載箱数	B・Cランク箱数
平安時代	土師器、須恵器、白磁、丸瓦、平瓦				
鎌倉時代	瓦器				
江戸時代	土師器、瓦器、施釉陶器、染付、軒丸瓦、丸瓦、平瓦				
合計		3箱	0点(0箱)	3箱	0箱

5. まとめ

今回の調査では、江戸時代の仁和寺中門・土塀の基礎と、その北側に広がる整地層を確認した。遺構としては、その作業区画となる石敷1、中門の地業である石敷2を検出した。中門は寛永18年(1641)から正保4年(1647)の間に建てられていることから、石敷2はこの時期に施工されたものである。

1・2区ともに、整地層の厚さは1.1m以上、基盤層(地山)は確認できなかったことから、中門一帯の江戸時代以前の地表面は、現在よりも標高が低く、現在の地形は、整地して嵩上げたものであることが明らかとなった。現在、中門と土塀の南側には、高さ約2mの南面する石垣による高低差がある。中門から延びる土塀の基礎は、南側が石垣、北側が地覆石となっている。地覆石の下部は、上から土塀の根石、石垣背面の栗石となる。栗石を覆う整地層の下から石敷1が検出された。

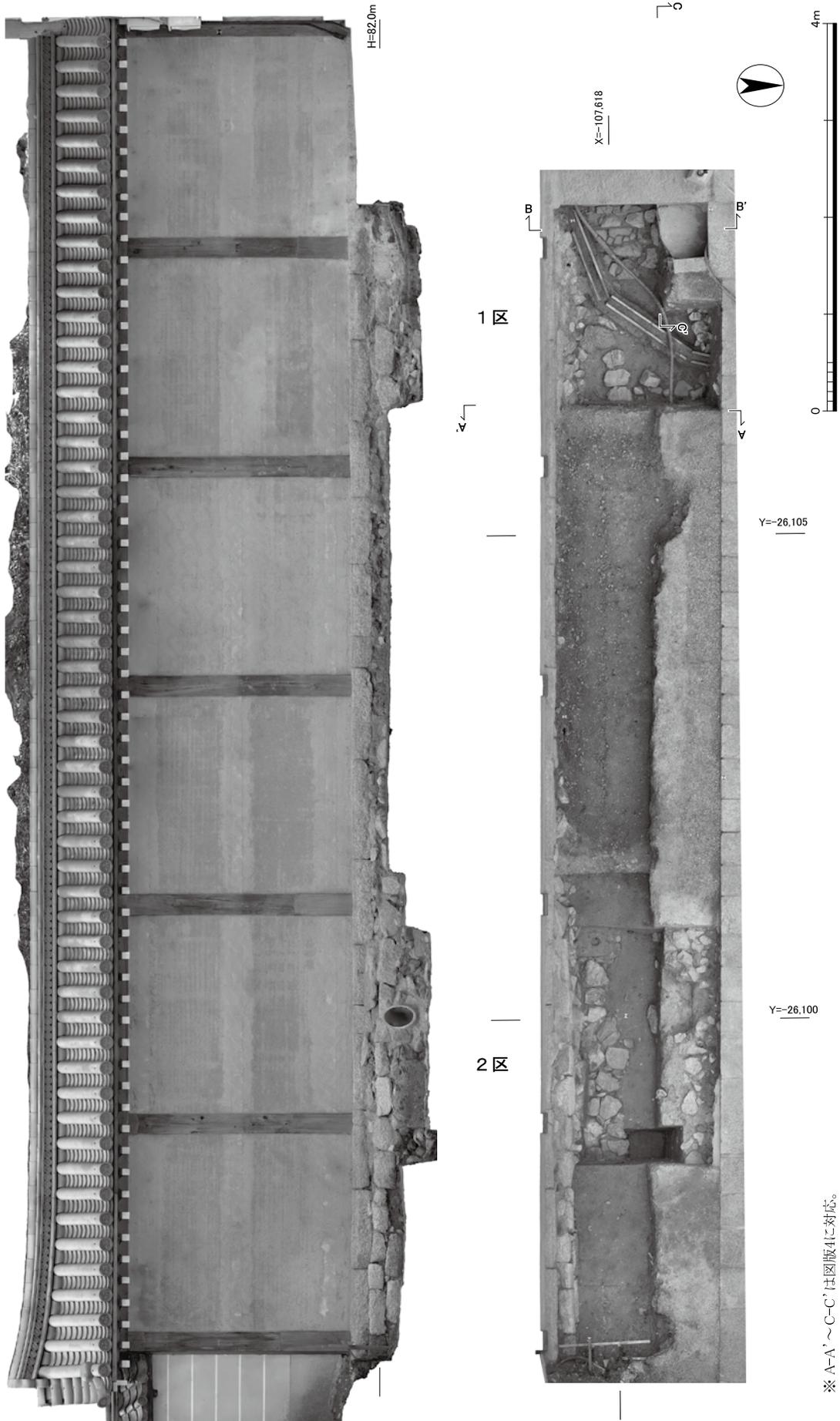
石敷1は、整地層中に存在し、掘形を持たない。そして、石敷1を構成する石は平らな面を上に向けており、その成立面の整地層は固く締まる(図版4-2区東壁12層)ことから、石敷1を含む整地層は、土地造成の一過程の作業面を形成したと考えられる。さらにその上層の整地層も、約0.3~0.4mごとに固く締めながら水平に積み上げられ、2つの単位に分かれる。各単位の整地層の上面は、栗石の上面、根石の上面に対応している(2区東壁5・8層)。以上を踏まえて、整地の過程を復元する。

石敷1と整地層で作業面を形成した後、栗石を石垣背面に入れつつ、その北側を水平に整地する(2区東壁8~11層)。栗石の上面まで整地が行われると、栗石の上に根石を据える。根石を据えた後、その北側を根石の上面まで水平に整地する(2区東壁5~7層)。根石の上部に地覆石を据え、土塀を構築する。なお、石敷1の別の機能として、石を置くことで地盤強化を図ったと考えられる。

以上のような整地方法を行った範囲や深さについては不明であるが、土塀北側の土地造成は、土塀基礎部の構築と並行して、丁寧に行われたことが明らかとなった。

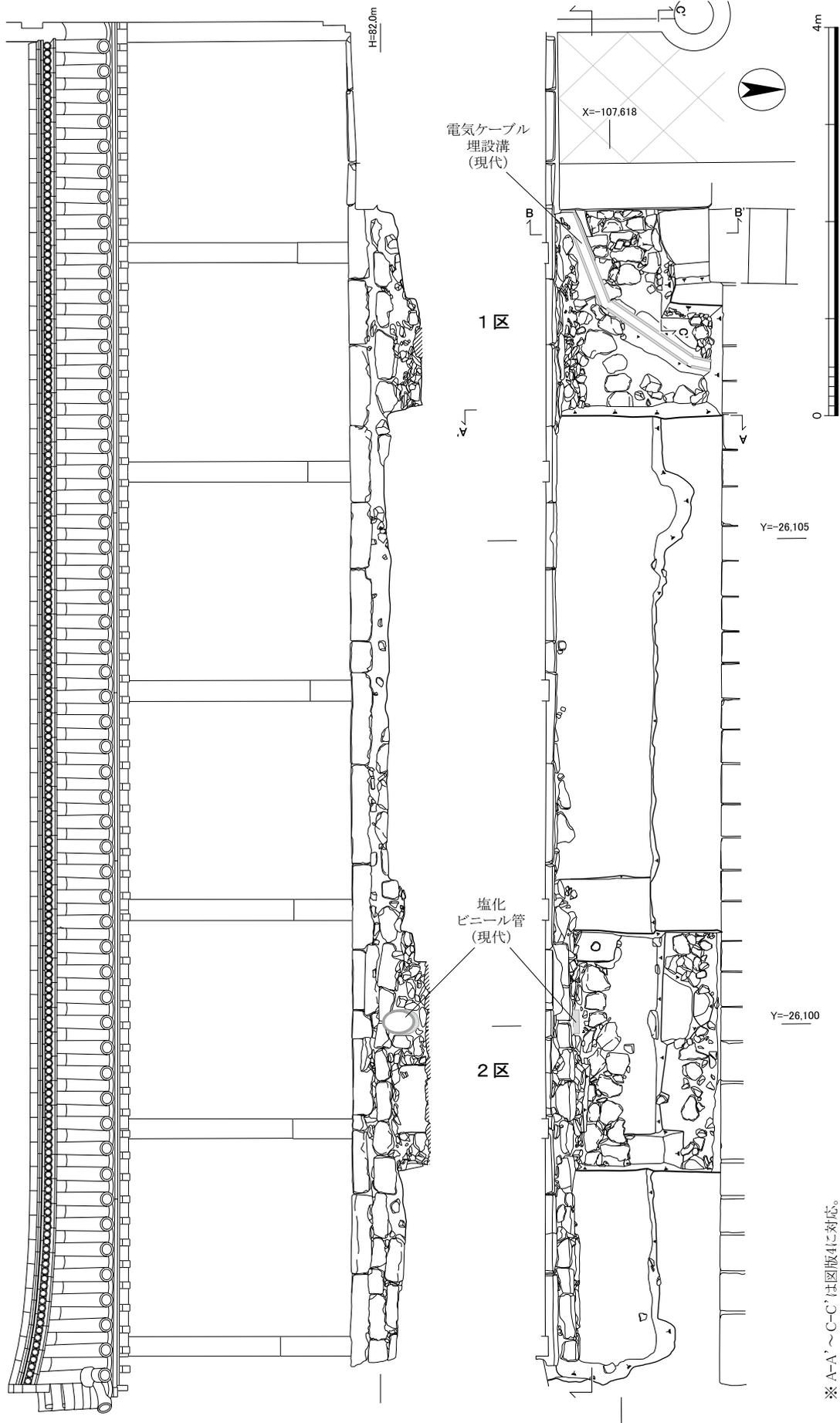
圖 版

調査区平面・南壁立面オルソ画像 (1 : 60)



※ A-A' ~ C-C' は図版4に対応。

図版2 遺構

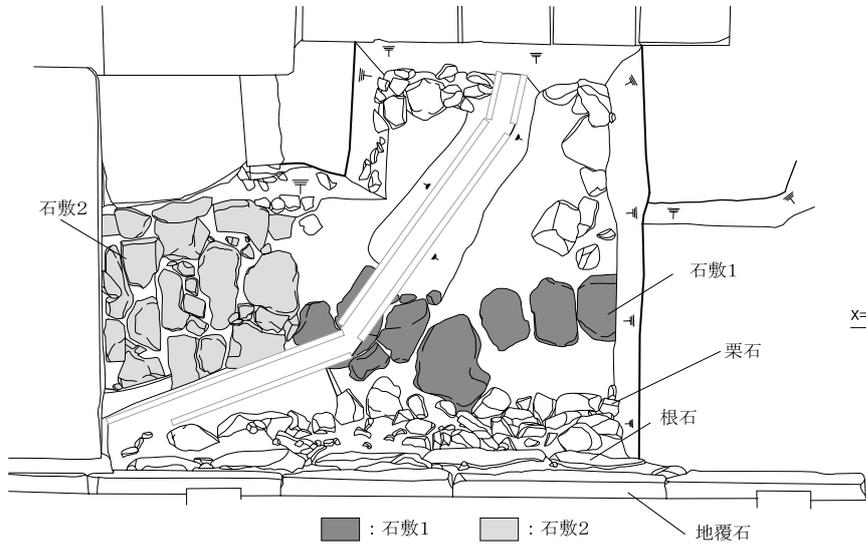


調査区平面図、南壁立面図 (1 : 60)

1区



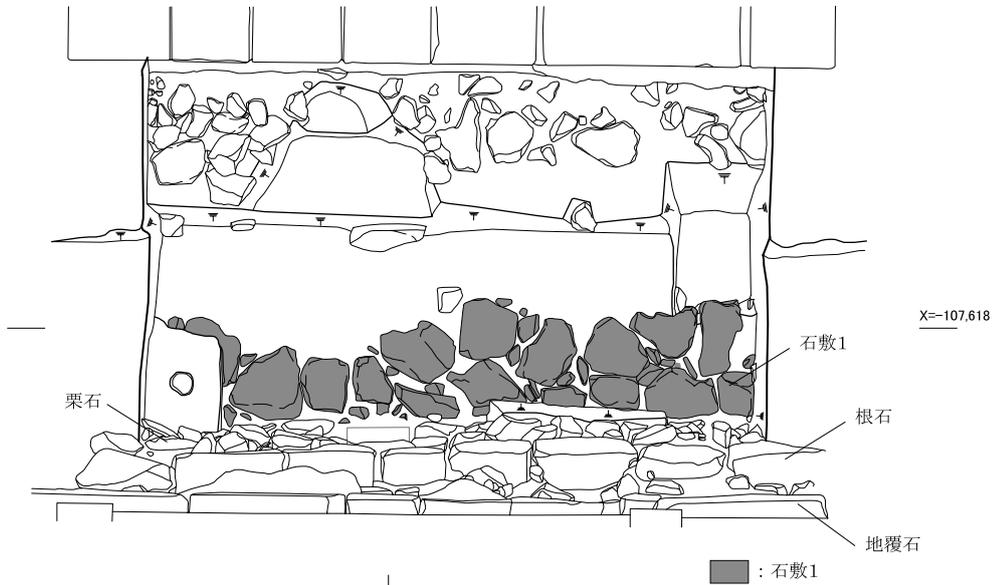
Y=-26.108



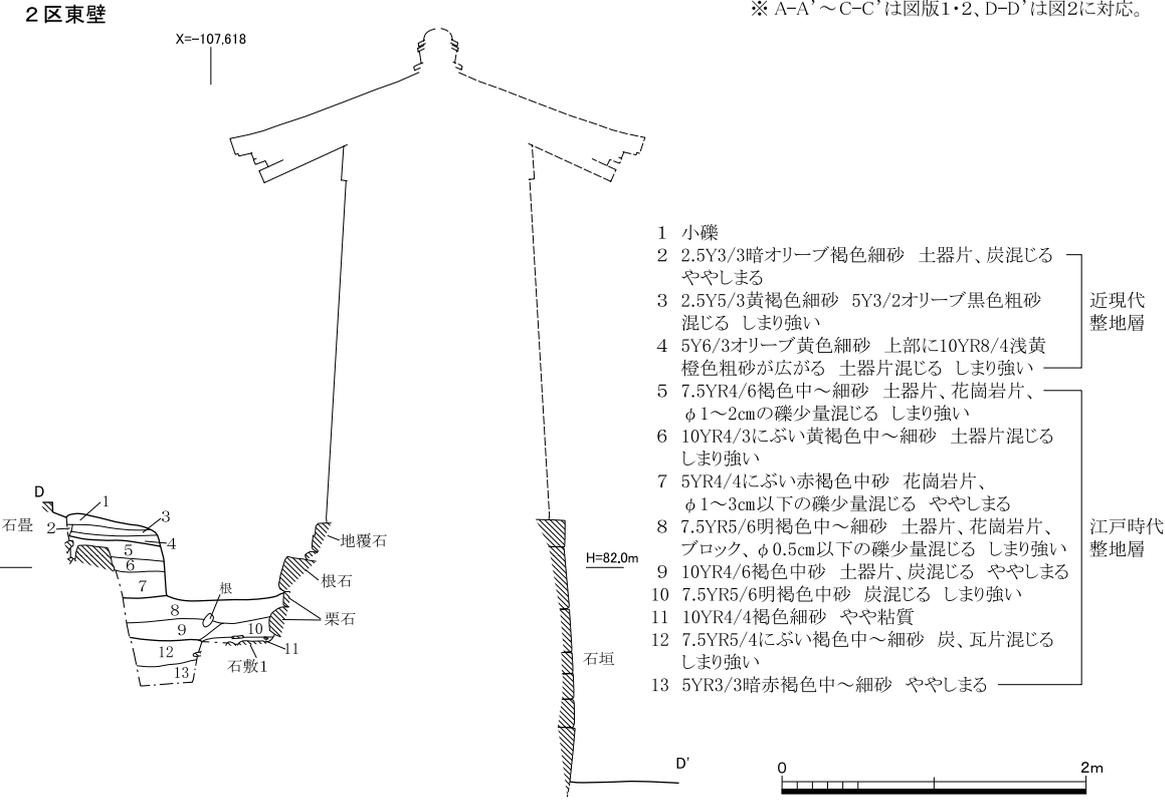
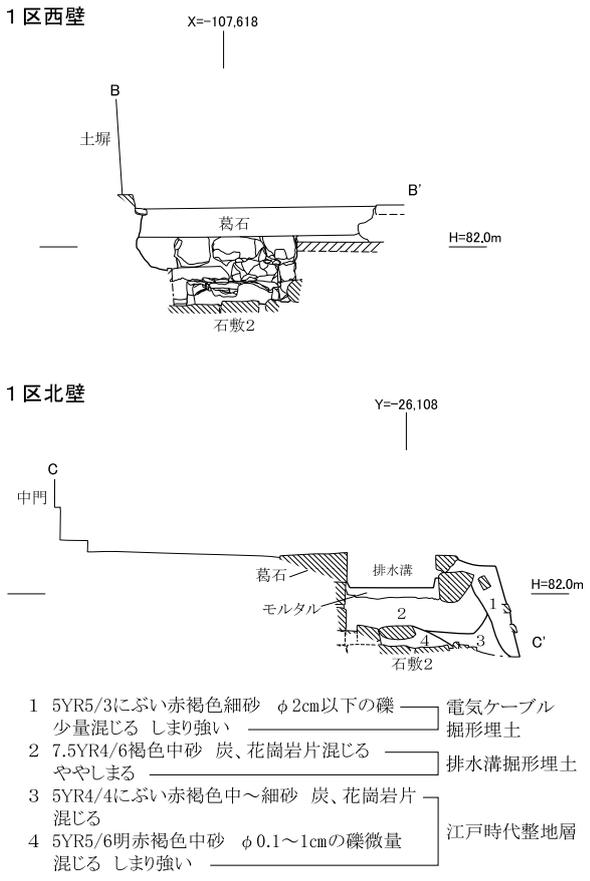
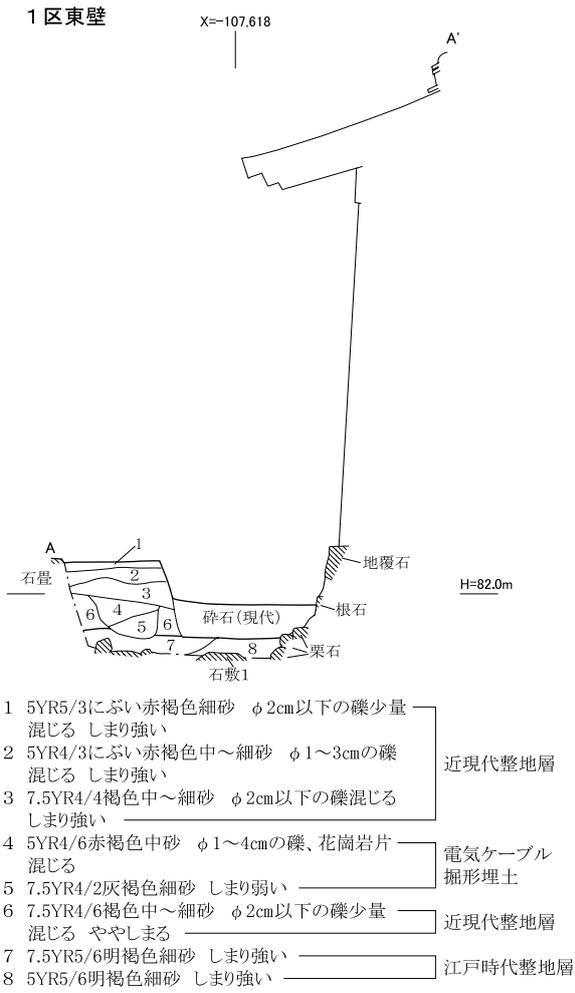
2区



Y=-26.100



1区・2区平面図 (1:30)



※ A-A'～C-C'は図版1・2、D-D'は図2に対応。

調査区立面・断面図 (1:50)



調査地全景（北東から）



1 2区全景（北西から）



2 1区全景（東から）



3 1区石敷1（北西から）



4 2区断割部断面（西から）

報告書抄録

ふりがな	しせきにんなじごしょあと							
書名	史跡仁和寺御所跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2022-1							
編著者名	渡邊都季哉							
編集機関	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2022年12月15日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
しせきにんなじ 史跡仁和寺 ごしょあと 御所跡	きょうとしうきょうく 京都市右京区 おむろおうち 御室大内33	26100	A803	35度 01分 47秒	135度 42分 50秒	2022年5月 19日～2022 年6月1日	6.8㎡	排水溝 施工工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
史跡仁和寺 御所跡	史跡	江戸時代	石敷	土師器、瓦		江戸時代前期の中門・土塀建築に伴う造成を確認し、その作業区画となる石敷を検出した。中門の基礎地業の石敷を検出した。		

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2022-1

史跡仁和寺御所跡

発行日 2022年12月15日

編集
発行 公益財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961